

江府の中央と云、諸方への道法、此はしを元とす、

〔江戸名所圖會〕一日本橋ほんばし 南北へ架す、長凡二十八間、南の橋詰西の方に御高札を建らる、欄檻葱寶珠の銘に、萬治元年戊戌九月造立と鐫す、此橋を日本橋といふは、旭日東海を出るを親見る故に、之か號るといへり、事跡合考に云、日本橋のかゝりしは慶長十七年の後歟とありて、其考へをとし極月八日、武州江戸日本橋に高札を建るとある時は、慶長十七年より以前なりと云るべし、此地は江戸の中央にして、諸方への行程も此所より定めしむ、橋上の往來は、貴となく、賤となく、絡繹として間斷なし、又橋下を漕つたふ魚船の出入、且より暮に至る迄、嗷々として囂し、

〔武江年表〕一慶長八年、今年江戸町割を命じ給ふ、○中この時日本橋をはじめて掛らる、

〔慶長見聞集〕二一里塚つき給ふ事

日本橋は慶長八癸卯の年、江戸町わりの時節、新敷出來たる橋也、此橋の名を人間は、かつて以て名付す、天よりやふりけん、地よりや出けん、諸人一同に日本橋とよびぬる事、きたひの不思議と沙汰せり、然るに武州は、凡日本東西の中國にあたりと御誕有て、江城日本橋を一里塚のもとと定め、三十六町を道一里につもり、是より東のはて、西のはて、五畿七道のこる所なく、一里塚をつかせ給ふ、

〔慶長見聞集〕五日本橋市をなす事

見しは今、江戸町東西南北に堀川ありて橋も多し、其數をえらす、扱又御城大手の堀を流れて落る、大河一筋有、此川町中を流れて南の海へ落る、此川に日本橋只一筋懸る、見は往來をせり、○中件略の日本橋は慶長八癸卯の年、江戸町割の時分、新規に出來たり、其後此橋御再興は、元和四年戊午の年也、大川なればとて、川中へ兩方より石垣をつき出し懸給ふ、敷板の上三十七間四尺五寸、廣さ四間貳尺五寸也、此橋に於て晝夜二六時中、諸人群をなし、くびすをついで往還たゆる事な